

E 37 子どもと老人の交流に関する研究——佐賀県における実態調査——  
福富小 光武 万寿美 佐賀大教育 ○福田公子

目的 核家族化の傾向とともに、独居老人が増加し、一方子ども達は老人と接する機会が減少してきていると言われている。このような状態は、子どもの認識の発達のためにも、老人の人間としての生きがいの持続のためにも、ひいては社会の正常な発展のためにも改善されねばならない。改善の方策は、様々なレベルから意図される必要があるが、家政学からの実践的な提言も重要と考える。このような問題意識のもとに、現実に地域における、子どもと老人の交流の実態を明らかにすることとを目的とした。

方法 佐賀県の都市部および農村部に居住する小学校5年生と中学校2年生601人、および彼らと同居している祖父母273人にアンケート調査を行った。また、同地域の独居老人の若干名に面接調査を行った。期間は、昭和55年9月から11月であった。

結果 家庭内に老人と子どもが同居している場合には、何らかの交流はあった。特に、相互に愛給関係が成立している場合には、交流も密であった。ただし、「対話」をあまりしないという者が30%もいたことは問題であろう。別居している場合には、「小遣いやプレゼント」などをもらう孫は83%もあり、物の給与は盛んであった。

ところが、家庭外の地域社会においては、老人と子どもの対話は、「あまりしない」39%、「ほとんどしない」42%という回答で、交流は非常に疎であった。

今後は、家庭内での精神的な相互交流、および地域社会での交流を促す環境づくりを目指す必要があるだろう。そのための具体的な方策を実践することが、中間世代としての親や教師や地域住民の責務と考える。